

Title	ケアの学び : 埋もれたものからの問いかけ
Author(s)	佐藤, 光友
Citation	Communication-Design. 2014, 10, p. 87-95
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27510
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ケアの学び 埋もれたものからの問いかけ

佐藤光友（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）

Learning of Care

a question from the buried things

Mitsutomo Sato (Center for the Study of Communication-Design:CSCD,Osaka University)

論者は、高校生が、震災ボランティアの体験を通じて、人間の事物への「配慮 (Care, Sorge)」の在り方を問うことから出発して、人と物、人と人との繋がりに気づき、その自覚を深める授業を試みた。そこで、実際に、土壌から日用品を掘り起こすボランティア作業に携わった高校生の言葉をとり挙げ、埋もれた「モノ」－日用品であったが廃棄物として処理されようとしている物－がそこに住んでいた人々と深く関連していたことに、ボランティアする主体自身が気づかされていく過程を考察する。その際、「物」の用在性、「モノ」と「物」との差異性、日用品としての物と物との関連性についての考え方を深めていくために、ハイデガーの思索を手掛かりとしている。さらに、「物」の中でも、「食べ物」についての卓越した考え方を、レヴィナスの糧についての論考から捉え直してみたい。

The author attempted to conduct a class in which his high school students were encouraged to ask how people “care” things, to realize the relationship between people and things and between people and people, and to deepen their self-awareness, through their volunteer experience in disaster-stricken areas. This paper refers to words of a high school student who participated in the volunteer activity of digging up daily necessities, and examines the process in which volunteers themselves are made aware that the buried substances, which were once daily necessities but are about to be discarded as wastes, are closely related to the people who lived there. The readiness-to-hand of things, the difference of substances and things, and the relationship of things as daily necessities are discussed, by mentioning the thinking of Heidegger. Furthermore, this paper tried to examine the notable idea about food by the discussion of Lévinas.

キーワード

震災ボランティア、ケア、ハイデガー、レヴィナス
volunteer in disaster-stricken areas ,care, Heidegger, Lévinas

1. はじめに

この小論では、高校生が震災ボランティアの体験を通じて、人間の事物への「配慮 (Care, Sorge)」の在り方を問うことから出発し、人と物、人と人との繋がりに気づき、その自覚を深める授業実践（研究授業）の理論的考察を展開する。授業実践では、土壌から日用品を掘り起こすボランティア作業に携わった高校生の言葉をとり挙げ、埋もれた「モノ」⁽¹⁾ - 日用品であったが廃棄物として処理されようとしている物 - がそこに住んでいた人々と深く関連していたことに、ボランティアする主体自身が気づかされていく過程を探る。その際、「物」⁽²⁾ の用在性、「モノ」と「物」との差異性、日用品としての物と物との関連性についての考え方を深めていくために、ハイデガーの思索を手掛かりとしている。さらに、「物」の中でも、「食べ物」についての卓越した考え方を、レヴィナスの糧についての論考からも捉え直すことを試みている。

この授業（2013年度実施）には、震災ボランティア活動に参加した高校生 A 君が受講しており、彼の手記⁽³⁾ を取り挙げ、震災ボランティア活動についての考えを深めていく双方対話型授業を展開した。授業を通して、A 君のボランティア活動での体験への理解を深めることで、ボランティアする際の心構えを再認識することができると思う。

2. 授業実践、「導入」段階

まず、A 君本人に自らの手記を読んでもらった。

取り組みとしましては主に清掃活動や地面に埋まってしまった家の基礎を掘り出す作業をしました。家の基礎を掘り出す作業をしているときにお皿や箸など、日常を感じるものが次々と出てきました。このような日常用品が土の中から出てくるといふ非日常に最初はかなり戸惑いました。ですが、作業に没頭していくにつれて段々と疲れがたまり、朦朧^{もうろう}としてきて何も思わなくなっていました。

そんな中で、子どもが使っていたのであろうキューピーの人形が出てきました。それも何も思わずに、ゴミ山に放り投げたのですが、その直後になくなってしまった祖母が同じような人形をくれたことを思い出し、「その人形を使って遊んでいたのであろう子どもや、それをあげた人はいったいどうなってしまったのだろう？」と思い、^{ほうぜん} 呆然と立ちすくんでしまいました。

また、瓦礫撤去作業をしたときに出して頂いた豚汁のおいしさは今でも忘れません。このおいしさは本当はこちらで食べる豚汁と大して変わらないのかもしれませんが。ですが、自分のほんの少しでも役に立てたのだという達成感や、豚汁を作って下さった方がこめた我々への「ありがとう」という気持ち、そんなものがごちゃ混ぜになって、この豚汁のおいしさを生み出しているのではないか・・・自分はそう考えます。被災地で一番強く感じたのは、現地の方々は自分もつらいはずなのに他人の気持ちを思いやってみんなで一丸となって生活しているということでした。お互いに感謝の気持ちを持って、思いやりながら生きていく。その姿に強く感銘を受けました。

このこと以外にもたくさんのことを教えていただきました。最初はしてあげようという気持ちで被災地に入ったのですが一緒にボランティア活動をした仲間や、現地の人々と関わっていくうちに自分の無力さに気づき、してあげられたことの何倍ものことを被災された方々にしてもらっているのだということに気づきました。

このボランティアの経験では普段の生活では得られないようなさまざまな経験を得ることができました。また新たなことに気づいていくためにもこれからもボランティアを続けていきたいと思います。

私たちは、身の回りの「物」に取り囲まれて生活している。食べることにに関してだけでも、箸、スプーン、お皿、湯飲み等々と限りがない。これらの「物」への多様な関わり方が、私たちの日々の生活や暮らしを成り立たせているということに疑問の余地はない。

だが、震災ボランティアに参加したA君は、土の中に埋もれていた「モノ」を掘り起こす作業に従事したことで、まず、日常性を脱した「物」の在り方に気づかされた。このことは、「物」は、日常的な道具連関から離れ、壊れてしまった使うことの出来ない「モノ」として現出してくるということである。ハイデガーの言葉を借りれば、「モノ」は、日常的に使われている「道具(Zeug)」という在り方を離れ、目の前にただあるもの、すなわち、「眼前存在者(Vorhandenes)」として存在している⁽⁴⁾。眼前存在者としての「モノ」は、現存在としての人間のケアの領域を離れて、すでに道具連関との全体性からはみ出し、道具の派生的な様態として露呈する。

そこで、授業者は、A君の「物」への気づきのプロセスから他の生徒たちがボランティア活動への理解を促す授業を展開していく。生徒たちには、ハイデガーの二様の物の在り方、すなわち、単なるモノとして扱われた存在=手前にあるもの(手前存在フォアハンデンサイン)とし、物本来の在り方をしている状態=手許にあるもの(手許存在ツーハンデンサイン)について板書し説明する。その説明をした後、まず、授業者は、生徒たちに

「君たちにとって大切な日用品をあげて下さい」と問う。

多くの生徒たちに共通した回答は、「消しゴム、筆箱、教科書、弁当箱、鉛筆」

といった学校で使われている「物」が多かった。それだけ、高校生は、学校での生活が長いということである。

3. 授業実践、「導入」から「展開」段階へ

授業者は、「普段、慣れ親しんでしまっている用具を、特別意識することは日常的にはないですか」と問うと、

ある生徒から「その物がなくなったとき、その『物』の重要さがわかる」という答えが返ってきた。

さらに続けて、「日用品に対する配慮の仕方を教えて下さい」と聞いてみると、

「教材、教科書は汚さないようにする」

「壊れないように手入れする」

「同じものを長く使う」といった回答であった。

「どうして同じものを長く使うのか」という質問に、

「人からもらったものなど、特にその人の気持ちが入っているように思えるから」というものであった。

この回答から授業者は、ボランティア活動に参加したA君が、キューピーの人形を同じように廃棄物として扱ったとき、祖母からの人形のことを想起し、廃棄されていく「モノ」が、道具連関、すなわち、ハイデガーの言う「適所全体性 (Bewandtnisganzheit)」の枠からはみ出して存在していることへの理解を生徒たちに促す。廃棄物として捨てられようとしている「モノ」が、単なる認識作用としての対象の在り方ではないということにA君は気づかされたのであり、「モノ」ではなく、「物」への思いとして自覚し直される。

授業者の「物への気遣いと、人への気遣いの違いは何か」という問いに対して、

約半数の生徒が、「物」への気遣いと、人への気遣いとの違いはあまり感じられなく、

「同じようなものである」と答えた。

さらに「なぜ同じようなものと思うのか」

という授業者の質問に対して、ある生徒は、

「物には、必ずその物の持ち主がいるから」という答えであった。

このことから、掘り起こしたキューピーの人形 (モノ) は、誰か人との結びつきのなかで「物」として存在していたのであり、それは欠如態としての客体的物体ではないという、そのことにA君が気づかされたということである。

確かに、震災によって埋もれてしまった「モノ」は、日常的に使われていたものとは様変わりしていたであろう。しかしながら、壊れた「モノ」は、その「モノ」を通して想起しう

る他者への思い、さらには慮りによって、もはや、ボランティア活動での撤去作業としての物体化してしまった「対象 (Gegenstand)」としてのみ存在することを否定する。

だが、A君は、撤去作業を続けていくなかで、「モノ」への戸惑い—この戸惑いは、「モノ」を廃棄物ではなく、「物」、すなわち日用品として捉えていることからくる戸惑い—は、やがて消失していった。「この廃棄物を処理しなければ」という思いが言葉として発せられたとき、日常的に慣れ親しんだ人と「物」との生きた関わりは喪失し、「物」の物性は後退し、無用な物としての「モノ」が顕わになってくる。A君はこのような状況下のなかで、廃棄物として投げつけたキュービーを、人形として意味付与された贈与であること、あらためて「モノ」という廃棄物ではない他者との繋がりを意識させる「物」であることとして再確認するに至ったのである。それだけではない。「モノ」ではなく、人間、現存在へと帰還する「物」の道具連関を通じて、二人称としてのA君の祖母への思い、被災した人形の持ち主である三人称の人々への思いが重なり合っていく。

授業者は、その重なり合う人称性を越えた思いが、撤去作業の手を止めてしまうA君の心境であるということを生徒たちとともに心に留めておかなければならない。そして、このようなA君の心の変化を説明し、「物」への気遣いと、人への気遣いの連関性について、さらに授業を展開していく。

次に、瓦礫撤去をしたときの「豚汁」の話へと進み、自己と他者を繋ぐ「食べ物」に言及する。そこで、「食べ物」は、ハイデガー的な意味における道具、例えば、ペンが文字を書くための手段であるのとはちがって、単なる「生活手段」ではない。「物」の中でも、「食べ物」に特別の意味を与えたレヴィナスの考え方に着目する。

確かに、ハイデガーの場合、現存在としての人間は、「世界内存在 (In-der-Welt-Sein)」として、道具という体内に取り込まれない用材に対して配慮する存在者として捉えられていて、「食べ物」という生を滋養する享受的なものへの配慮についての論究は見られない。

「おいしいスープ」は、道具連関におけるハンマーや針や機械といった無機的な「物」ではなく、私たちの生を養うものであり、「享受 (jouissance)」の対象としてつねに味覚と結びついている (TI,p112-113:158)⁽⁵⁾。

そこで、授業者は、「A君の味わった豚汁のおいしさというのは、どんなおいしさなのか」を問うてみた。

「愛情のおいしさ」「心のこもったおいしさ」「ひとことでは言えないおいしさ」

「お金では買えないおいしさ」などの答えが返ってきた。

この生徒たちからの回答からもわかるように、「豚汁のおいしさ」は、条件としての調理法の上手さや、食材のよさを述べたものではない。

授業者は、わたしたちの口へともたらされる「食べ物のおいしさ」が、他者と豚汁を食べるというおいしさの共有とつながっていることを生徒たちに提示する。そして、ボランティ

アする主体を成り立たせている身体、実はその身体こそが、他者からの恵によって成立していることを示唆する。

レヴィナスは、「～によって生きる (vivre de…)」という生の依存的なフォルムを提示する (TI,p112:158)。というのも、この享受の「～によって生きる」ことには、「食べ物」、すなわち口へともたらされる「糧」という他なるものに依存し、「他 (Autre)」を必要不可欠なものとする契機が含まれているからである。このことは、まさに、身体への享受とともに、そのおいしさの共有と、自己固有の身体への受容の喜びという、自己存在の実存性を示している。

レヴィナスは、糧としての用在、すなわち、「食べ物」を他の用具、道具から際立たせながらも、「用具は体系を形成するとともに、自らの存在に不安を抱く実存の配慮に繋ぎ留められている」 (TI,p142:199) ということを確認している。常に自らの主体としての存在に不安を抱えつつ生きている私たち現存在は、この道具は「～のために」という適所全体性における道具連関の終着点として存在しているからこそ、その不安定さを「モノ」へのケアを通して安定したものになろうと努力するのである。

このことから、授業者は「食べ物」をともに分かち合うことの喜びと、自分の身体がボランティア活動をする「いま・この」場所という実存的な体験であることに、生徒たちの関心を向かわせていく。

被災した人々のボランティア活動に対するお礼の気持ちとして、A君に差し出された「豚汁」の味は、まさに「おいしいスープ」という糧を表象しているレヴィナスの論考に呼応する。ボランティア活動が僅かながらでも何らかの意味を持つことが出来た。

享受は、享受を養うものを越えた無限に準拠しているのではなく、享受に供されるものの潜在的消失、幸福の不安定性に準拠しており、糧は嬉しい偶発事のように到来する (p150:211)。このことから、喜ばしい偶発事、すなわち、あくまでもA君に差し出された「豚汁」という糧は、また次のボランティア活動の際に差し出されるとは限らない偶発的なものであるということを私たちは意識しておかなければならない。生徒たちは、差し出された「食べ物」を介した心遣いがあくまでも偶発的なものであるという事実性として一見返りを求めない無償性として一認識しておく必要がある。

4. 授業実践、「展開」から「終末」段階へ

ボランティア活動の4原則 (①自発性・自主性、②公共性・連帯性、③無償性・無給性、④創造性・先駆性) を挙げるができるが、この授業では、特に、無償性以外に、今、何が必要とされているのかを考えながら行動する創造性・先駆性を取り挙げた。なぜならば、

このことは、ボランティア活動をする際の心構えと深くつながっているからである⁽⁶⁾。授業者は、生徒たちにボランティア活動をする際の心構えについて、

「相手に必要な手助けをしよう」「善意の押し売りにならないように」
「積極的に、かつ謙虚に振る舞おう」「学ぶ姿勢をわすれないようにしよう」
などという項目を挙げる。

A君は、ボランティア活動における「豚汁」という糧の喜ばしい偶発事を、自己が自己の生を生きているということの感覚を回復させる重要な出来事として受け取り、上記の心構えを実感として体得していく。授業者は、「豚汁」に象徴された被災地の方々の暖かい気持ちが、A君に学ぶ姿勢をもたらした出来事であることを強調する。

今一度、授業を振り返り、モノから物への変容、その物から人との繋がりへ、そして、廃棄物の撤去作業というボランティアが、単なる廃棄物を扱っているのではないということを生徒たちとともに再確認していく。非日常的に地面に埋没してしまったモノは、今や日常使われていた漆器として浮かび上がる。そして、豚汁の味は自己の身体に浸透すると同時に、日常の漆器として目の前に提供される、そのプロセスを確認していく。

最後に授業者は、この授業からボランティアすることの心構えが理解でき、ボランティアに参加しようと思いましたか」と問うてみた。

半数以上の生徒から、これからボランティア活動に参加しようと思うという答えが帰ってきた。そして、「日常から物に対する配慮を持って生活し、ボランティアしてみたい」「物との関わりを意識することで、謙虚にボランティアできる」「ボランティアするというのではなく、学ばせてもらうことが大切だと思った」といった発言を聞くことができた。

「元気を回復せしめる『契機』が、例えば、食べるといったことには内包されており、この『契機』は食べることの本質的要素ですらある」(TI.p113:159)。すなわち、元気を回復させるために食事をするといったように、「～によって生きる」という人間の在り方は、現存在を取り囲み、現存在が捉えようとする諸事物がそこへと由来し、そこへと回帰していく大地といった環境世界としての「元基内存在 (l'être-dans-l'élément)」として存在する(p142-143:200)。

このようにレヴィナスは、「元基 (l'élément)」を「ある (il y a)」—この「ある」イリアというのは、存在するもの一切の無化の果てに、もはや否定することのできない何ものかがあるということ—へと延長されるものと捉え、「内面化 (intérieurisation)」としての享受が大地の異邦性そのものにつきあたるものと主張する (TI.p151:212)。享受は、自らの内への内面化であり、元基の中へと沈潜する内面化でもある (TI.p143:200)。

このレヴィナスの内面化としての享受は、自己への糧の享受であり、自己が他ならない自ら自身の存在可能性と関わりながら存在する在り方である。自己への糧の享受は、本来的な自己の在り方を目覚めさせる実存様態である。そこで、実存様態の共通項として、ハイデ

ゲーにおける実存様態概念規定の一つである「内-存在 (das In-Sein)」の分析を取りあげ、レヴィナスのそれとを対比する。実存的なものとしての現存在は「～のもとに住んでいる」

確かに、レヴィナスは、「ハイデガーが享受という関係を考察していない」(TI,p142:199)と指摘する。だが、自己中心的な内面化としての享受が、同時に「元基内存在」として捉えられるということを、レヴィナスは、「物」の総体としての世界が存在論的に解釈された場合、「住むこと」、「家」を証示するものとして論じている (TI,p142:199)。

ただこの「住むこと」、「家」というものが、もはや物理的な空間を意味するものではない実存的なものを示しているということは生徒たちにも理解できるであろう。だが、授業者は、「家」が単なる物理的空間 (例えば、実験室) といったようなものではないということを説明しておく必要がある。

そこで、レヴィナスが示す「住むこと」、「家」を、ハイデガーが『存在と時間』第12節で論考を企てた (SZ.S.53) 「内-存在」の「内 (in)」= 「住む (wohnen)」ということから検討するならば、「住む」というのは、自己が世界の「許に (bei)」住んでいるということであり、「内存在とはそれゆえ世界内存在という本質的な機構を持っている現存在の存在の形式的な実存的表現」として解釈できる (SZ.S.54)。

「他者」の「身代わり (substitution)」になるというレヴィナスの言葉は、他者への気遣い—ハイデガー的に言えば、他者に対する顧慮的な気遣い (Fürsorge) のことであり、道具的存在者という「物」に対する配慮的な気遣い (Besorge) とは区別された慮りの在り方に通底する。この気遣いによって、A君は、自らの非力さに気づく「唯一者 (l'unique)」としての自己となりうるのである。なぜならば、この気づきは、他者との根源的な出会いの場に自らを送り返し、他者に向かうことによって、慮る者自らが自らの可傷性を自覚することでもあるからである⁽⁷⁾。

5. まとめ

この授業を通じて、ボランティア経験を振り返り、A君自身「被災でのボランティア活動は、援助する者への反省からはじまる」と語ってくれた。ボランティアに参加していない生徒からも、「自らを振り返りながらボランティアすることの大切さを知った」という声を聞くことができた。この授業では、ハイデガーあるいは、レヴィナスの物への気遣いについて学習し、その知とA君のボランティア体験とを総合させることで、生徒たちが自らの存在を確認しながら、他者とともに生きているこの世界への企投性 (奉仕活動への投企) の重要性を示すことができた。

A君の自己の無力さへの気づきは、むしろ、被災された人々の苦しみに対する責任感のあ

らわれであり、このボランティアを継続していくことへの自覚に繋がっていく。ボランティアをする主体としてのA君自らが、目の前の「他者」が被った苦しみを感じたことによって、被災者に対する応答可能性、すなわち、責任を担っていることを自覚できたのである。

生徒たちとの対話・応答・アンケート等から次のことを確認することができたといえるであろう。この授業実践によって、生徒たちが、他者のために貢献できる活動が、逆に、他者によって自分自身の成長をも促しているということに気づかされたということ。そして、埋もれた物から感じ取ったA君の思いを確認すること、ハイデガーあるいは、レヴィナスの物への気遣いについて学習することで、ボランティア活動に対する具体的な心構えを持つことができたということである。論者は、この学びからさらにボランティア活動を続けてくれることを生徒たちに期待する。

註

- (1) ここでカタカナ表記した「モノ」というのは、客体化した使用できない欠如態としての物のことである。
- (2) ここでは、日用品など「道具」を「物」と呼ぶことで、「モノ」と区別している。
- (3) 「東日本大震災1年」読売新聞、2012.3.12, 35頁。
- (4) M.Heidegger, *Sein und Zeit* (1927), Tübingen, 1984, S.72ff. (以下、SZという略号で示す)
- (5) E.Lévinas, *Totalité et Infini*, Martinus Nijhoff, 1971, レヴィナス, 合田正人訳『全体性と無限』国文社、1998年 (以下、TIという略号で示す)
- (6) 村川浩一、上野谷加代子 監修・執筆『社会福祉基礎』実教出版、2013年、60頁参照。
- (7) 児島亜紀子「認識に先立つ召喚—レヴィナスから援助原理へ」『社会問題研究』第53巻第2号、2004年3月、24頁参照。児島は、レヴィナスの存在論を、援助論における「主体の主体性そのもの」を問い直しうる福祉哲学して再解釈することを試みている。

参考文献

- (1) 佐藤光友「社会参加と幸福」『高校倫理 教授用指導書』実教出版、2013年
- (2) 原田隆司『ボランティアという人間関係』世界思想社、2000年
- (3) ジャン＝リュック＝ナンシー『フクシマの後で 破局・技術・民主主義』以文社、2012年
- (4) ジャン＝ピエール＝デュブユイ、嶋崎正樹訳『ツナミの小形而上学』岩波書店、2011年
- (5) 森 一郎「世界を愛するという事」『思想としての3・11』河出書房新社、2011年
- (6) 宮野安治『教育関係論の研究』溪水社、1996年